文芸プラザ

短編小説

# ペンの復讐（上）

今井 隆

岩島由美子は、「小説・近未来」が創刊されたときからの読者である。行きつけの本屋で創刊号を宣伝するポスターに、「あなたの現在を切る」と、書かれていたので引きつけられた。付きあっていた加藤登志雄と別れたばかりの時で、心が萎えて何もする気がしなかった。

二十二歳と若かったけれども、なぜか、自分はもう結婚しないのではないか、とさえ思っていた。

由美子の小説好きは、すでに小学校の時から始まっていた。国語の教員をしていた父の影響だったのだろう、少年少女世界文学全集を六年生の夏休みまでに総て読了していた。日記も毎日付けていたことが文章能力を伸ばした。作文を担任の先生にいつも褒められていた。作家への道を意識し始めたのは、中学生になってからであった。自分とさほど歳の違わない少女が、ある文学賞を受賞したので、早速、単行本を買ってきて読んだけれども、奇抜な表現が多いだけで内容がないのにはがっかりした。「これなら自分でも書ける」と思って、実際に中学でのいじめをテーマに小説を書き始めた。リアリティーを追求すればするほど、苛められている生徒が特定されるというジレンマに陥り、五十枚ほど書いたところで断念した。その時由美子は、小説というものは、並大抵のことでは書けないと思った。それから数日して、机に座って静かに本を読んでいた由美子の父親に、「小説って難しいね」と話しかけると、父親は椅子をくるりと回転させて、由美子に向き合った。

由美子は小説を書いた顛末を話すと、父親は途中で由美子の話の腰を折って、「由美子、小説家を目指すのなら総てを捨てる覚悟がいる、と言われているよ。昔の話だが、Hという作家は貧乏のせいで、自分の子どもを栄養失調で亡くしている。Tは奥さんが出産するという時期に、ふいとインドに修行のようなことに出かけている。Mは、HやTのように家庭は犠牲にしていないけれども、長い間、闘病生活をしてキリスト教の信者になったことで人間の魂に迫る作品を書いている」などと蘊蓄話をした後で、お前には無理かも知れないけれども、最近の軽い小説は書けるかも知れないから諦めずに頑張りなさい、と言った。

由美子は今でも父親との会話がそこに再現できるほど鮮明に覚えている。というのは、父親はその二日後に交通事故で他界したからである。高校受験勉強に突入したことで小説を書くことはできなかったし、有名進学校であった高校に入学してからは、勉強が忙しくてそれどころではなかったけれども、東京の大学の文学部に入ってからは、今までのことが嘘のように時間が出来たので、気の向いた時に随筆や掌編を書いては文学賞に応募した。しかし最高が二次審査通過で、由美子は自分にはやはり父親が言った通りに、経験と能力がないのかもしれないと思っていた。

加藤登志雄と知り合ったのは、大学の三回生の夏休みである。中堅の商事会社に就職がほぼ内定し気分が開放的になっていた時期だった。何となく創作に集中しようかなと思っていた矢先に、同じ文学部に小説を書いている加藤登志雄が在籍していることを友人に教えてもらった。名前と顔が何とか一致する程度しか面識のない男だった。由美子は機会があった時に、注意深く加藤登志雄を観察したけれども、何となく、馬が合わない気がした。背が高くて目鼻立ちもきりっとしていたが、どことなく、抜け目のない世渡り上手な男に見えた。女生徒に囲まれて、談笑している姿が何となくいやらしかった。

加藤は由美子を見つけると、女学生との会話を中断して、つかつかとやってきて、「やあ、由美子さん、あなたも小説が趣味なんだって」と言った。由美子は、心の意図とは違った感情を顔に作って、「まぁ」と言って笑った。

「いゃあ、君の笑い顔、とってもチャーミングだねぇ」と、すばやく加藤が言った。由美子の心は、固くなって、「そんなことないですよ」と応えた。

加藤は胸ポケットから、折りたたんだ厚い紙片を取り出しながら、「ちょうど良かった、これ最近書いたんだけど読んでくれない」と言った。どこかしら、はにかんでいる様で、由美子は意外な感じがした。差し出された紙片を、拒絶するわけにはいかずに、由美子は手を出したのだった。

しばらくは読む気もせずに、そのままにしていたら、どこで由美子の電話番号を調べたのか、加藤から電話があった。

世間話もそこそこに「どう、読んでくれた？」と、加藤が言った。

「忙しくて……まだ」と、由美子はつれなく答えた。

加藤は、少しだけ沈黙して「そう」と低い声で言った。小説を書くようになったきっかけを聞かれたり、就職のことを話したりした後で、加藤は「じゃあ、その内に、是非読んでね」と念を押して電話が切られた。

また、加藤から電話があるような気がした。由美子が、加藤の作品を読み始めたのは、二三日経ってからだった。由美子は一気に三十枚程度の掌編を読み終えた。殺人を犯してしまった主人公の、時効が切れる直前の心の葛藤がテーマの作品で、読者を引きずり込ませる筆力は相当なものだった。また、作品からは加藤のちゃらちゃらした印象とは打って変わって、非常に繊細で的確な表現が各所に散りばめられていた。（文は人を表すと言うけれども、どっちが本当の加藤なのだろう）と、由美子は心で呟いた。

加藤が将来、すごい作家になるかも知れないという思いがよぎった。

電話があったのは、それから半月ほどあとのことだった。

小説のことはまだ鮮明に頭の中に残っていたけれども、加藤のことは忘れかけていた。加藤はまだ就職が決まっていないようで、どこの企業に面接にいったなどと話しをするだけだったので、由美子の方から「小説だけどね」と切り出した。

「はっきりいって、人間の機微がうまく表現されていて、とても良かったですよ」と言うと、加藤はまるで何かが弾けたように、小説を書く苦労や楽しみを話し出したのだった。

由美子は加藤の話に引きずり込まれ、気が付いた時には一時間以上も話し込んでいた。

電話を切った後で由美子は、趣味だけで話が盛り上がったとしても、その話が切れた時にどうなるのだろうかとふと思い、会う約束をしたことを少しだけ後悔した。

しかし、いざ喫茶店で会って見ると、加藤は幼い時に父親を亡くしており、新聞配達をしながら苦労して生きてきたことが分かったし、色々なことに興味がわく性格のようで、とにかく経験が豊富だった。由美子は、大地に根を張り巡らしている木を想像した。根の割には、かなり細い幹が地上にあり、それが今の加藤の作品である。何れは経験と言う「根」によって裏打ちされた加藤の文学は、巨木になるに違いない、と思った。

加藤との次のデートは、島崎藤村の生家が残っている馬籠であった。由美子の在籍する大学からは、車で片道五時間程度かかる距離だったので、遠すぎると思ったけれども、島崎藤村には興味があったので、加藤の提案を受ける気持ちになった。

加藤は何度も馬籠に来ているらしく、道を良く知っていた。

馬籠が近づくと、加藤は「木曽路はすべて山の中である、という文章で始まるのは、夜明け前だったよね」と言った。

「あるところは岨づたいに行く崖の道であり、あるところは数十間の深さに望む木曽川の岸であり、だったかな」と、由美子はその続きが自然に口から出た。

加藤は随分と驚き、「いやあ、由美子さんの前では、僕の文章なんて子どもみたいなものかも知れないね」と言ってから言葉を継いだ。

「でも、木曽路は山の中だったのは昔のことで、結構、開けているんだよね」

「天が広いんですね」と由美子が言うと、加藤は頷いてから、「変な話だけど、雄大な山があるから、天が広く見える。海の上では、天が広い、とは言わないでしょう。文学も絶妙なバランスの上に成り立っているものを書きたいなあ」と答えた。

馬籠は宿場全体が斜面の上に形成されており、道は必然的に坂となっていた。

遠くにはなだらかに山の稜線が続いていた。どこかしら秋の匂いのする風が心地よかった。

藤村記念館は、藤村の生家を利用して作られていた。藤村が愛用したというペンや生原稿が展示されている。

加藤が由美子の後ろに来て、「藤村も子どもを餓死させているんだよ」と呟いた。由美子が振り返ると、加藤の顔が直ぐ近くにあった。

「創作っていうのは、身内を犠牲にして初めて成り立っていく」と加藤は悲しそうに言うのだった。

記念館の外に出ると、太陽はかなり傾きかけていた。

由美子はその日から、加藤を斜に見ることはしなくなり、信頼できる男友達として意識するようになっていった。

由美子と加藤は気の置けない関係となって、お互いの作品について評価をしあった。由美子の作品に対して、加藤は十分に納得できるだけの論拠を持って指摘したので、由美子が創作をする上でとても有益だった。

二人は次第に恋仲になり、お互いのアパートに泊まりあうようになっていった。

由美子が、加藤の酒癖が悪いことを知ったのは、そんな関係になってしばらく経ってからだった。加藤が仲間十人くらいで同人誌を主宰したいと言って、その打ち合わせを兼ねた飲み会をすることになったのである。たまたま由美子の友人である佐竹玲子も加わることになった。まだ誰も、由美子と加藤の仲を知る者はいなくて、少し話が合うみたいだ、というのが二人に対する大方の認識だった。

宴会は盛り上がり、時間が進むほどに加藤は饒舌になっていった。誰それと誰それが出来ている、とかセックスの体位がどうだとか、由美子に取っては嫌な話になっていた。佐竹玲子は下ネタが好きらしくて、結構はしゃいでいた。由美子はトイレに立った。催していたのは事実だが、その場にいるのが嫌だったこともある。

用を済ませてから外に出て、しばらく夜空を眺めてから宴席に戻った。由美子が部屋に入ると、先ほどの空気とは明らかに変わっていた。加藤だけが騒いでいるというふうで、加藤の隣にいる玲子は間の抜けた顔をして、由美子を見た。

幹事が「そんじゃ、お開きにしよう」と言ったので、まるでその声を待っていたかのように十数人が一斉に席を立った。

加藤は相変わらず座りこんでおり、由美子と加藤が部屋に残された。

「大丈夫ですか」と由美子が言うと、加藤は目をとろんとさせて「そんなところに立っていないで、こっちへ来い」と大きな声で言った。

由美子が側に行くと、いきなり頭を叩かれた。ゴンと鈍い音がして、一瞬目の前が黄色くなった。目を開けると、にやにやしている加藤がいた。由美子が目で抗議をすると、「恐い目をするな。お前は、俺の言う通りに小説を書いていりゃ良いんだよ」と言った。

由美子は急に悲しくなって、席を立った。「おい、どこにいくんだ。まだ話は終わっていない！」と言う声が追いかけてきたが、由美子は無視してばたばたと外に出た。何時、靴を履いたのかも分からないくらいに、慌てていた。一刻もその場を逃れたかった。由美子は、酒がほとんど呑めなかったので、先ほどの飲み会のことをほとんど記憶していた。

由美子は、「出来ることなら総て忘れたい記憶……」と夜空に呟いた。

携帯電話の電源を切って、由美子は足取りを重くして岐路に付いた。由美子がアパートのドアを押すと、真っ黒の室内から電話の呼び出し音が聞こえた。蛍光灯を付けて掛け時計を見ると十一時であった。由美子は電話の呼び出し音を途中から一、二、三と数えた。十八のところで、呼び出し音が途切れた。由美子は電話の接続線を抜いて、ベッドの上に仰向きになった。

由美子の頬から涙が流れ落ちてきた。加藤とのベッドの上で演じられた愛撫が急に脳裏に浮かんだ。加藤は、「初めてなの？」と聞き、由美子は、最初は笑い、そしてとても悲しくなって涙を流したそのシーンを、突然思い起こしたのである。

加藤から手紙が来たのは、二日後だったから、呑んだ翌日に手紙を書いたに違いなかった。由美子は、手紙をテーブルの上に放り投げて、「もう、終わりになるんだろうね」と呟いた。

佐竹玲子から電話があったのは、その時だった。

玲子は「元気？」と言うなりしばらく沈黙した。そして、いきなり「由美子、加藤君とどうなっているのよ……。本当なの？」と声を落とした。

「どうなっているって？」

「飲み会でさ、加藤君がひどいことを言ってたから……」

「どんな？」

「由美子がね、セックスの時の声が……、ひーひー言って……、本当に色っぽくって参ったとか、さ……。他にも聞くに耐えないようなこと……。由美子がトイレでいないときよ。それでね……」

由美子は思わず、「止めて！」と叫んだ。加藤に頭を叩かれたあの時の衝撃が全身を駆け巡り、立ちくらみがした。

玲子は、一呼吸置いてから「あんな男、最低よ。地獄に落ちればいいのよ」と言った。

「私が馬鹿だったのよ」と由美子が返すと、玲子は「でもね、ものは考えようだからね」と言って言葉を継いだ。

（あすに続く）

いまい・たかし　昭和30年、岐阜県益田郡（現下呂市）萩原町に生まれる。農林水産省に勤務するかたわら、30歳ぐらいから小説、詩、ルポなどを書き始める。文芸同人誌「麦夢」主宰。短編で、「岐阜市文芸祭賞」受賞。平成12年に水稲新品種「龍の瞳」を発見して育成。19、20年と、お米の食味コンクールで日本一に輝く。現在は、（資）龍の瞳の代表を務めながら、森の再生などを夢見る。

文芸プラザ